

上書きされた景観：廣瀬文庫本『筑前名所図会』の 再発見

山根, 泰志
九州大学附属図書館図書館企画課企画係

<https://doi.org/10.15017/4061016>

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2019/2020, pp.37-48, 2020-07. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International

上書きされた景観 — 廣瀬文庫本『筑前名所図会』の再発見 —

山根 泰志†

<抄録>

九州大学附属図書館所蔵廣瀬文庫に、『筑前名所図会』の異本2種が所蔵されている。従来よく知られている、福岡市博物館所蔵の奥村家本にはない情報を多数有し、資料的価値は極めて高い。本稿では、廣瀬文庫本『筑前名所図会』の再発見された経緯や伝本上の位置づけ、伝来等を報告するとともに、奥村家本の絵図と比較することにより今後の活用可能性について展望する。

<キーワード> 奥村玉蘭, 名所図会, 福岡藩, 地域史, 地誌, 都市史, 民俗学, 美術史, 廣瀬文庫

The Over-painted Landscapes — Rediscovery of Chikuzen-Meisyo-Zue in Hirose Collection —

YAMANE Yasushi

1. 廣瀬文庫本『筑前名所図会』の再発見

1.1. 『筑前名所図会』について

『筑前名所図会』は博多の町人奥村玉蘭（1761～1828）によって著された福岡を代表する地誌である。筑前各地の名所や古跡、故事について、多くの書物や玉蘭自身の実地調査と写生による絵図により解説したものである。数多くの改稿を経て、文政4年（1821）に完成したとされるが、出版されることなく¹、奥村家に遺された稿本（以下奥村家本）が現在福岡市博物館に所蔵されている。昭和48年（1973）にその影印複製版が、昭和60年に活字翻刻版が出版された。



図1 甲本 席田郡鏡石之図

鏡石への影の映り具合を確認しつつ写生している中央の人物は玉蘭自身を描いたものではないかと推定される。御笠郡竈門石の絵図にも玉蘭自身とその従者を描いたと思われる人物が見えるが、似た服装をしている。

1.2. 廣瀬文庫本の再発見経緯

九州大学附属図書館廣瀬文庫にも、カード目録に『筑前名所図会』が2種各6冊（680/チ/52 以下甲本・680/チ/53 以下乙本）記載されているが、長く所在不明になっていた²。九州大学六本松地区の六本松図書館が平成21年（2009）に閉館する前後から、伊都地区への統合移転が完了した平成30年以降にかけて、檜垣文庫の未整理資料等から廣瀬文庫本『筑前名所図会』が断片的に発見された。なぜ六本松図書館に寄贈された檜垣文庫から廣瀬文庫本が発見されたのかは後述するが、この時期に発見されたのは、下記のような事情がある。

- A) 移転前より箱崎地区の旧中央図書館で廣瀬文庫の調査が進められていた³
- B) 六本松図書館所蔵資料の移転のために網羅的に館内の調査が行われた
- C) 六本松図書館からの移転後、一時的に分蔵されていた檜垣文庫資料が、伊都地区への統合移転の完了により、民俗資料等の総合研究博物館所蔵分を除き、新中央図書館に統合・集約され、調査が効率化した

実際には、檜垣文庫の整理が進められた平成初期にも廣瀬文庫本が断片的に発見されていたと思われ、先行して旧中央図書館に送付されていた形跡がある⁴。しかし、その頃は廣瀬文庫本『筑前名所図会』の存在が意識されていなかったからか、調査や復元が行われず、問題が顕在化するのには、Aの廣瀬文庫の調査を待たなければならなかった。

† やまね やすし 九州大学附属図書館図書館企画課企画係（〒819-0395 福岡市西区元岡744） E-mail: yamane.yasushi.188@m.kyushu-u.ac.jp



図2 甲本 御笠郡巻頭

廣瀬文庫印と誤って貼付された檜垣文庫の請求記号ラベル。

1.3. 檜垣文庫中の『筑前名所図会』

檜垣文庫は九州大学教養部で国史学を担当した檜垣元吉（1906～1988）が蒐集した歴史的総合資料群で、中世から近代にまで及ぶ約3万点の古文書を中心に、書画軸等の美術品や民具にも及ぶ。檜垣没後、六本松図書館に寄贈され、『檜垣文庫目録』も刊行されているが、余りにも膨大かつ零細な資料が多いため、目録に採録されていない資料も数多く存在する。

廣瀬文庫本『筑前名所図会』はそうした未整理資料から断続的に発見されたが、廣瀬文庫と気づかれずに目録に採録されているものもある。『檜垣文庫目録』和装本編の請求記号チ-10に採録された『筑前名所図会』がその代表であり⁵、甲本各巻の絵図を中心とする一部が、綴じ糸が外され解体された上でまとめられた状態である。檜垣が執筆した奥村家本の複製版解説に、奥村家本と比較参照するために異本の絵図が紹介されているが、その絵図はチ-10に収められた絵図と一致する。つまり、奥村家本との比較研究のために檜垣の手元にあった廣瀬文庫本『筑前名所図会』が、写真撮影のために綴じ糸が外され、檜垣没後に由来がわからなくなり、檜垣文庫の中に分散したものである⁶。

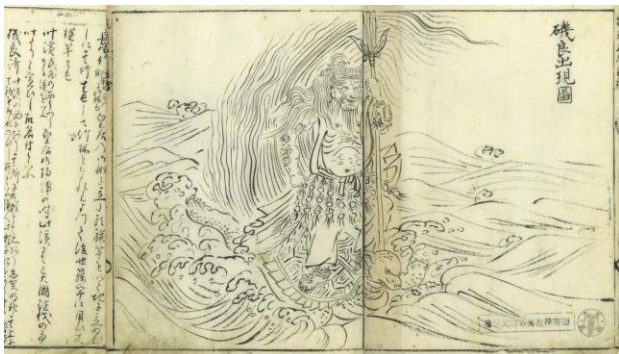


図3 甲本 那珂郡磯良出現図

檜垣が複製版解説に掲載している図の一つ。本来別丁であった絵図が二次的に接合されている。

2. 廣瀬文庫本『筑前名所図会』の概要

2.1. 廣瀬文庫本の冊数

現在発見されている廣瀬文庫本『筑前名所図会』を、可能な限り復元した上で奥村家本の構成と比較してまとめたものが表1である。目録カードによれば、甲本・乙本ともに6冊ずつあることになっているが、甲本は6冊分あるものの、解体された巻には欠けている箇所があり、乙本は1冊欠けている。檜垣文庫にはまだ膨大な未整理資料があり、その中に未発見部分が含まれている可能性が高い。

奥村家本	甲本 (680/チ/52)	乙本 (680/チ/53)
巻一 福岡	巻一 福岡 (解体状態, 71頁)	巻一 福岡 (本文のみ, 52頁, 24.2×16.5cm)
巻二 博多		巻二 博多 (本文のみ, 61頁, 24.5×16.8cm)
巻三 那珂郡・席田郡・早良郡	那珂郡・席田郡・早良郡 (題箋剥落・解体状態, 114頁)	
巻四 御笠郡	御笠郡 (題箋剥落・解体状態, 93頁)	御笠郡 (本文のみ, 60頁, 24.3×16.7cm)
巻五 夜須郡・上座郡・下座郡		
巻六 嘉麻郡・穂波郡・鞍手郡		
巻七 遠賀郡	巻五 遠賀郡・宗像郡 (怨霊出現図のみ分離, 155頁, 26.0×18.5cm)	遠賀郡 (絵図のみ, 30頁, 24.8×16.8cm)
巻八 宗像郡		[宗像郡] (表紙欠落, 絵図のみ, 37頁, 24.7×16.8cm)
巻九 糟屋郡	巻六 粕屋郡 (解体状態, 124頁)	
巻十 怡土郡・志摩郡	巻八 伊都郡・志摩郡 (108頁, 26.1×18.5cm)	

※奥村家本の夜須郡から鞍手郡の間には題箋の巻数表示と異なる巻数が目録題に見えるが、ここでは題箋の巻数表示で統一する

※甲本の頁数は現在発見されたもののうち、『筑前名所図会』独自の用紙（白紙を含む）の半丁分を1頁と数えたもの

※乙本の頁数は、本文・絵図がある紙の半丁分を1頁と数えたもの

表1 諸本構成比較表

2.2. 甲本の構成

甲本では、福岡、那珂郡、席田郡、早良郡、御笠郡、遠賀郡、宗像郡、粕屋郡、伊都郡、志摩郡が確認されており、博多、夜須郡、上座郡、下座郡、嘉麻郡、穂波郡、鞍手郡を欠いている。題箋が残存しているのは、巻一福岡、巻五遠賀郡・宗像郡、巻六粕屋郡、巻八伊都郡・志摩郡の4冊で、巻次と内容が明確である。那珂郡・席田郡・早良郡と御笠郡は題箋が剥落しており、

巻次は不明ではあるが、染みや綴じ穴の一致から奥村家本同様那珂郡・席田郡・早良郡が1冊にまとまっていたことは確実である。

巻五遠賀郡・宗像郡の裏表紙見返しに「八冊之内」とあるので甲本は本来8冊であり、九州大学に寄託された段階で2冊欠けていたことになる。奥村家本の最終巻の巻十は怡土郡・志摩郡であり、甲本の巻八伊都郡・志摩郡が最終巻であったとすれば、甲本は全8巻構成であったことになる。奥村家本より2巻少ないが、遠賀郡・宗像郡のように、奥村家本で巻を分けている郡を合わせて1巻としている巻もあることから、甲本が8巻で筑前全体を網羅した完本であった可能性はあるものの、現段階では本来の構成は不明とせざるを得ない。

2.3. 乙本の構成

乙本では本文と絵図が別冊として分かれ⁸、福岡、博多、御笠郡の本文と、遠賀郡、宗像郡の絵図のみ確認されており、前述のように、1冊不明である。巻次表記があるのは福岡と博多のみで他はなく⁹、本来の構成は不明である。

2.4. 廣瀬文庫本の伝本上の位置づけ

前述のように、奥村家本の複製版解説において、檜垣は奥村家本と甲本の絵図を比較しており、甲本そのものについての説明はほとんどないものの、甲本を奥村家本に先行する「原本」と見なしている。甲本には奥書等はないが、版心に「筑前名所図絵」と印字された独自の用紙（内匡郭 21.2×15.7cm¹⁰）が用いられており、朱筆・付箋・貼紙等による訂正・加筆が多数見られる。奥村家本と比較すると、甲本の訂正・加筆は概ね奥村家本に反映されており、甲本が奥村家本に先行する稿本であることは明らかである。ただし、奥村家本には甲本の指示にない訂正・加筆も多数見られるため、甲本から奥村家本までの間にさらなる改稿があったことが想定される。

一方乙本は、転写の際の誤りを訂正しているだけで、本文・絵図の改訂を意図した訂正・加筆は見受けられないことから稿本ではなく、また、料紙等により近代以降の写本と推定される。甲本と比較すると、甲本に施された訂正がある程度反映されているものの、反映されていない箇所があることから、甲本のある段階での訂正を反映した伝本を写したものと推定される。絵図は甲本よりも丁寧に描き込まれ、同じ構図ながら描写が異なるものもあり、それは奥村家本には反映されていない。奥村家本とは異なる系統で発展した伝本が存在したことを示すものである。

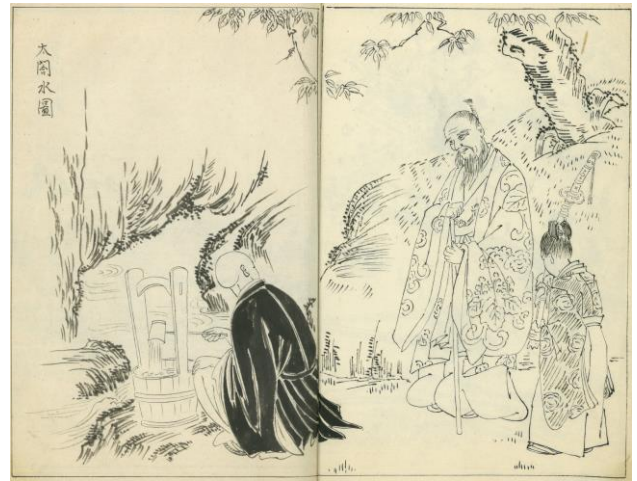


図4 乙本 遠賀郡太閤水園

甲本や奥村家本の秀吉には髭がないが、乙本のみ髭が追加されている。

2.5. 文政元年本系統の伝本

奥村家本には、「時に文政辛巳の冬、冬至の日になん縉紳家書」と、名前は伏せているが高位の人物による序文と、「文政四年歳在辛巳仲冬 玉蘭陳人書」と玉蘭による序文が掲げられており、いずれも文政4年（1821）である。甲本の序は冒頭しか見つかっておらず、序年等は不明だが、甲本の序を踏襲していると思われる乙本の序が参考になる。乙本の序では、「時に文政戊寅冬 四辻中将奉頼郷[卿?] 不無館主人書」と、奥村家本の「縉紳家」が京都の公卿である四辻公説（1780～1849）であったことが明示されている¹¹。玉蘭の序は「文政紀元臘月 玉蘭陳人自序」となっており、いずれも文政元年の序文である。奥村家本複製版解説において、檜垣は別本に四辻中将奉頼卿の序文を掲げたものが残っていると記しているが、その別本が甲本であるなら、甲本も文政元年の序文を有していた可能性が高い。奥村家本に先行する稿本が、文政元年にいったん完成し、その写本が流布していたことを示唆するが、そのことを証するように、文政元年本系統の伝本が、明治以降にも存在したことが、下記の断片的な史料からも窺える。

1) 『警固神社参考書類集』（1922）

警固神社社格昇進のために作成された『警固神社参考書類集』に引用された『筑前名所図会』（福岡警固大明神）は、「文政紀元臘月 玉蘭陳人」と記載されているように、文政元年本系統の伝本を引用したものである。甲本・乙本・『警固神社参考書類集』・奥村家本の重なる部分を比較すると、異同が分かりやすいのが、表2にまとめた石鳥居の額の記述である。

乙本が甲本の修正指示通りになっているのに対し、『警固神社参考書類集』は、「が筆なり」→「かけり」

の修正は反映されながら、削除指示のあった「城州の八幡山の僧」が残っている。同じく甲本が削除指示している割注の「忠之公の産霊なりし故・・・懸しかば今も昔も替らぬ御社なり」が文末に移動して残っているように、甲本の修正が部分的にしか反映されておらず、乙本とは異なる段階での甲本の修正が反映された伝本が存在したことを示唆している。

甲本 (赤字は原文の修正指示)	石の鳥居あり、額は城州の八幡山の僧猩々翁が筆なりかけり
乙本	石の鳥居あり、額は猩々翁かけり
警固神社参考書類集	石の鳥居あり、額は城洲の八幡山の僧猩々翁かけり
奥村家本	石の鳥居額ハ猩々翁なり

表2 諸本「警固大明神」記述比較表

2) 『福岡県神社史料』(中央図書館所蔵, 680/フ/56)

明治以降に作成された福岡県各神社の史料を蒐集したものの一部¹²。香椎宮作成の史料集に引用された『筑前名所図会』(巻六粕屋郡香椎宮)は文政元年本系統の伝本で、甲本の修正が反映されたものと一致し、奥村家本とは一致しない。「無格社沖濱恵比寿神社御由緒書」(社掌天野恒彦調進)・「村社下照姫神社御由緒書」(社掌天野春次郎調進)引用の『筑前名所図会』(博多澳濱夷社・吉祥女の社)は、乙本と一致し、奥村家本と一致しない。

3) 『筑前若杉郷土誌』(1957)

糟屋郡若杉村(現篠栗町)の郷土誌で、著者の合屋武の前書きによれば史料蒐集は昭和10年(1935)より始めたとのこと。太祖神社の関係史料として『筑前名所図会』(若杉山太祖権現)が引用されているが、甲本の一部の修正が反映されたものと一致し、奥村家本と一致しない。

4) 『志免町誌』(1969)

亀山八幡宮の由緒に『筑前名所図会』(亀山八幡宮)が引用されているが、甲本と一致し、奥村家本と一致しない。

『筑前名所図会』は、完成後に出版されなかったため、昭和48年(1973)に奥村家本の複製版が出版されるまでは、埋もれていたとされていた。実際、筑前の碩学長野誠(1807~1891)が文政11年(1828)より明治15年(1882)に至る50年以上の間渉猟した文献を記録した『関史筌蹄』にも、玉蘭の『勢陽紀行』は掲載されているが、『筑前名所図会』は掲載されていない¹³。しかし実は奥村家本に先行する文政元年の稿本を元にして写本が作成され、ある程度流通しており、特に神職関係者の間で参照されていたことがわかる¹⁴。『筑前名所図会』が、未完成の状態でありながらも同時代から評価されていたことを示すものであろう。

2.6. 廣瀬文庫本の筆跡

甲本と奥村家本が玉蘭自筆の稿本であるなら、それぞれの筆跡と一致するはずである。一瀬2012の方法に倣い、「筑前名所図会」という書名の筆跡を奥村家本と廣瀬文庫本とで比較した結果が図5である。


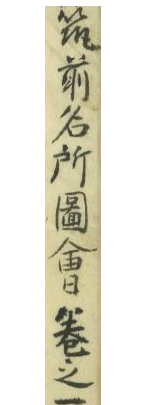

			
奥村家本 糟屋郡題箋 福岡市博物館所蔵	奥村家本 福岡目録題 福岡市博物館所蔵	甲本 福岡巻頭題	甲本 粕屋郡目録題

図5 奥村家本・甲本書名





			
福岡	遠賀郡・宗像郡	粕屋郡	伊都郡・志摩郡

図6 甲本題箋書名

まず、奥村家本の内題の筆跡を比較すると、「名」字の「夕」の筆跡が極めて特徴的で、2画目の上部に隙間があり、3画目が右側にずれており、全巻の内題で共通している。その他、「會」字の縦線が上に突き出しやすい、「日」の2画目の書き始めに隙間が生じやすいといった特徴もあり、全巻の本文は基本的に同一人物による筆であることが確認できる。一方題箋の書名の筆跡とは全く一致せず、外題は別人の筆である。

次に甲本の内題の筆跡を見ると、奥村家本の内題の特徴を全て備えており、筆跡が一致している。ただし、粕屋郡のみ筆跡が一致せず、別筆の可能性はある。題箋は現在四巻分しか残っていないが、遠賀郡・宗像郡と粕屋郡が内題の筆跡と一致し、福岡と伊都郡・志摩郡は一致せず、別筆の可能性はある。

以上、奥村家本と粕屋郡を除く甲本の本文の筆跡は一致し、それらは基本的に玉蘭自身の筆により執筆されたと考えるべきであろう。奥村家本の題箋の筆跡が別筆であることは、奥村家本は玉蘭以外の人物による装幀を経ている可能性を示唆する。一方甲本の題箋の一部に、玉蘭の筆跡が残っていることから、甲本は原装を伝えているものと考えられる。

また、乙本の筆跡を比較した結果が図7である。宗像郡は書名を記載した箇所がないため、代わりに共通する「所図」字を有する箇所を掲載した。福岡と博多の外題、福岡と博多の内題、御笠郡の外題と内題の筆跡が一致するが、それ以外は明確には一致しないことから、複数人数によって書写された可能性がある。

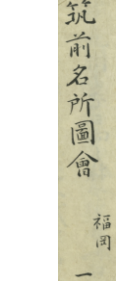
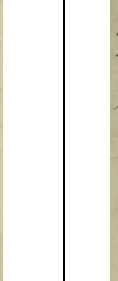
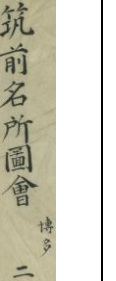
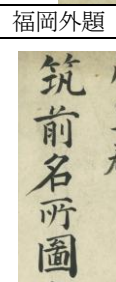
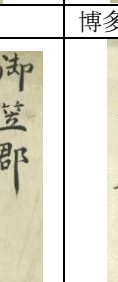
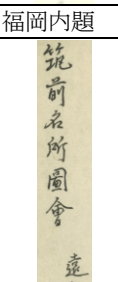
			
福岡外題	博多外題	福岡内題	博多内題
			
御笠郡外題	御笠郡内題	遠賀郡外題	宗像郡挿絵

図7 乙本書名

2.7. 廣瀬文庫本の伝来

廣瀬文庫は、出雲大社教福岡分院長の廣瀬玄銀(1855～1916)が境内に開設した私立福岡図書館(1902～1917)の旧蔵書を中心とする。大正14年(1925)に九州大学との寄託契約が成立し、昭和17年(1942)に延長された後、戦後に売買契約が成立し、附属図書館の所蔵に帰した。『筑前名所図会』には2種とも福岡図書館の蔵書票や蔵書印がなく¹⁵、蔵書目録(『福岡図書館図書目録』・『福岡図書館和漢書目録』)にも掲載されておらず、福岡図書館の蔵書として扱われていたかどうかは明確ではない。

また、廣瀬文庫は昭和17年の寄託延長時に980冊追加で寄託されており、『筑前名所図会』もその時に寄託されている。追加寄託分には、廣瀬家の縁者と思われる高木文弘¹⁶旧蔵の易占関係書と、国学者辛島並樹(1824～1897)の旧蔵書を含む神道・神社関係の文献

が大きな割合を占める。特に後者は職務上必要であった文献が、大正14年には寄託されずに廣瀬家に残されていたことを示し、『筑前名所図会』もそうした書物の一つであったことを窺わせる。『筑前名所図会』が神職関係者の間で伝えられ、参照されてきたことは、前述の通りだが、海妻甘蔵(1824～1909)、江藤正澄(1836～1911)、松田敏足(1838～1913)等、福岡を代表する国学者たちと交流があり、出雲大社教福岡分院以外の神社の神職も兼任していた廣瀬玄銀は、『筑前名所図会』を入手しやすい立場にあったと言える。



図8 福岡図書館 明治44年1月1日消印付絵葉書



図9 出雲大社教福岡分院と廣瀬玄銀

戦中から戦後の附属図書館は人手が不足しており、館員による稀覯本の調査や紹介は、昭和初期ほどにはできなかった¹⁷。寄託時が昭和17年であったことは、廣瀬文庫本『筑前名所図会』が埋もれる一因ではあったが、昭和20年の福岡大空襲で出雲大社教福岡分院は焼失したため、このタイミングで寄託されなければ、『筑前名所図会』も失われていたことであろう。

3. 廣瀬文庫本『筑前名所図会』の独自性

3.1. 甲本独自の絵図

奥村家本複製版解説において、甲本の絵図に奥村家本にない部分や優れている部分があることが、檜垣により述べられているが、現在発見されている甲本において、奥村家本にない絵図や独自の描写を持つ絵図、あるいは修正前の原画が残っている絵図をまとめたものが表3である。これらの絵図から甲本の独自性を検証する。

巻	画題	頁	奥村家本	備考
福岡	長崎番船帰帆図	2	荒戸山東照宮図に画題を変更 描写が異なる	
福岡	若宮八幡社	1	描く角度を変えて 2 頁に拡張	解説 p.9
福岡	清式観世音	1	描く角度を変え、3 頁に拡張	解説 p.21
福岡	金龍寺	2	描く角度を変更	
福岡	千眼寺曇華庵	2	描写が異なる	
那珂郡	磯良出現図	2	描写が大きく異なる	解説 p.10-11
那珂郡	勝馬神社図、中津神社図	2	無し	
那珂郡	伏見大明神社	2	無し	
早良郡	[湯記証]	1	描写が大きく異なる	本来 2 頁
早良郡	東油山	1	玉蘭の題詞なし	
御笠郡	西都図第三	2	描写が異なる	解説 p.14-15
御笠郡	[佐藤繁氏出家]	2	描写が異なる	
御笠郡	[鬼の硯石]	1	旅人を植物に変更	
御笠郡	山家駅	2	2 頁を 1 頁に縮小	
御笠郡	[山家駅の奇石]	1	秋山玉山の漢詩なし	解説 p.16
遠賀郡	[馬牧]	1	無し	
遠賀郡	吉田切抜図	2	描写が異なる	
遠賀郡	京麻生夫婦紅梅が部屋に遊ぶ図	2	描写が大きく異なる	
遠賀郡	若松蛭子祭	2	描写が大きく異なる	
遠賀郡	[皇后測]	2	描写が大きく異なる	
宗像郡	澳嶋図	2	無し (澳津嶋図の原画か ¹⁸⁾)	
宗像郡	澳津嶋	2	描写が異なる	
宗像郡	岩瀬	1	無し	
宗像郡	[怨霊出現]	2	描写が大きく異なる	解説 p.18-19
宗像郡	孝子正助恩賜を蒙る図	2	修正前の絵図とは描写が異なる	修正前の絵図あり
宗像郡	荒地金毘羅	1	無し	
宗像郡	手光村観音堂	1	無し	
宗像郡	津屋崎町	2	鐘崎津屋崎その外諸浦の図に変更	
粕屋郡	六孫王経基大宮司に御杯を賜ふ図	2	溝屋の原画とは描写が大幅に異なる	溝屋の原画あり
粕屋郡	毛利大友合戦	2	多々良浜古戦場の図に変更 (一部中国勢敗走に反映)	
粕屋郡	二又瀬	1	綱斎の原画とは描写が異なる	解説 p.22
粕屋郡	平家岩、木戸村	2	1 頁に縮小	
粕屋郡	笹栗駅	2	描写が異なる	
粕屋郡	須恵皿山の図	2	描写が異なる	
粕屋郡	駕輿丁池	1	無し	
粕屋郡	名嶋古城址	1	描く角度を逆にして 2 頁に拡張	
粕屋郡	香椎宮大廟の図其二	2	1 頁に縮小	
粕屋郡	海ノ中道乃図	2	福岡の城下遠近惣図に移動	
粕屋郡	安部嶋	1	無し	
伊都郡	叶嶽	2	無し	
伊都郡	喜久寺	1	無し	
伊都郡	[正覚寺]	1	無し	
志摩郡	長垂山遠望図→楳原之図	2	描写が異なる	
志摩郡	[鮫魚釣の図]	2	描写が異なる	

志摩郡	[円光寺の桜井]	1	無し	
志摩郡	桜井神社図其二	2	描写が異なる	
志摩郡	[原田兄弟奮戦の図]	2	兄弟切腹の図に変更	

表 3 甲本奥村家本挿絵比較表

3.2. 奥村家本にない絵図

まず分かりやすく廣瀬文庫本の価値を示すのが、奥村家本の段階ではなくなっている絵図である。紙幅には限りがあるため、全ての絵図を掲載できず、取捨選択した結果であろうが、これまで視覚的資料がなかった名所もあり、奥村家本とともに活用されるべき貴重な資料である。また、その取捨選択によって玉蘭の意図や価値判断も窺うことができるだろう。

3点ほど紹介すると、図 10 の粕屋郡駕輿丁池の絵図には、池に不思議な形の構造物が突き出しているのが見えるが、これは池の水を水路に流す水取り出しかで、松材で製作された発明品である¹⁹⁾。図 11 の粕屋郡安部嶋は、現在猫の島として知られる相島 (藍島) で、江戸時代は朝鮮通信使の寄港地として文化交流の舞台となった。相島の絵図は寛延元年 (1748) の通信使来訪時に岩国藩士が描いた「藍嶋図」(岩国徴古館所蔵) が知られるが、江戸後期の相島の景観を描いた絵図は貴重である。

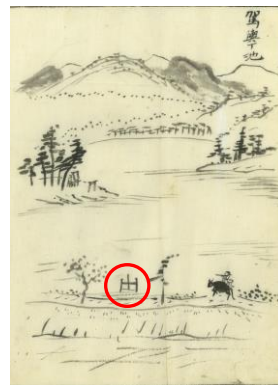


図 10 甲本 駕輿丁池

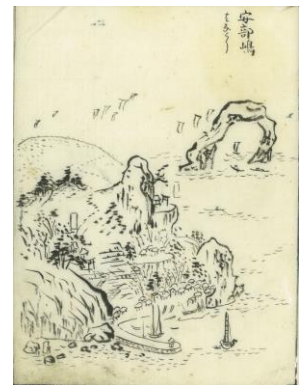


図 11 甲本 安部嶋

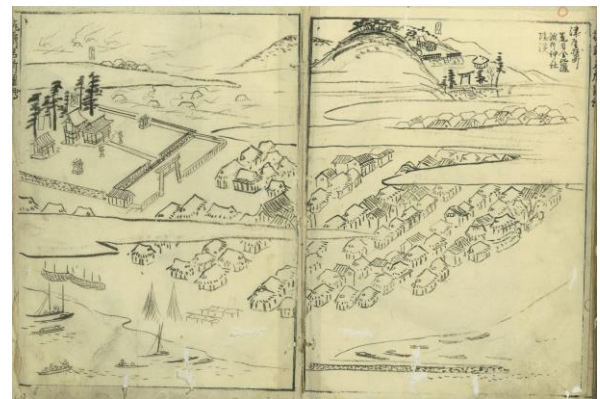


図 12 甲本 津屋崎町

図 12 は、製塩業と海上交易で江戸時代は筑前有数の浦であった宗像郡津屋崎町 (現福津市) の鳥瞰図で、

「津屋崎千軒」と称せられた街並みが描かれ、当時の繁栄を窺うことができる。奥村家本では津屋崎向かいの渡半島にある楯崎を中心とする絵図に差し替えられている。甲本の本文において、「楯崎ハ西海に臨みて、風景奇絶の山也」と朱筆にて周辺の名所とともに追記しており、玉蘭が次第に楯崎の景観のほうに心動かされたことが窺える。

3.3. 絵図の原画

凡例にあるように、『筑前名所図会』の絵図の一部は、玉蘭が描いたもの以外に、玉蘭の友人や諸家に依頼したものが含まれており、絵図には署名落款により絵師を明示している。しかし、奥村家本の絵図には落款印を写したものはあっても、落款印そのものが押印されたものはない。既に多くの改稿を経ている奥村家本の性格もあり、それらは原画より玉蘭が写したものとされている²⁰。一方甲本には落款印が残っている絵図が2点確認できる。

1) 二又瀬 (粕屋郡)



図13 甲本 二又瀬 綱齋画



図14 奥村家本 亀山八幡宮・二又瀬 福岡市博物館所蔵

奥村家本複製版解説にて檜垣が「綱」「齋」の落款印が残る原画として紹介している絵図である。原画のほうが描写が精密である。亀山八幡宮は甲本の段階では挿入する予定だけで、絵図はなかった。

2) 六孫王経基大宮司に御杯を賜ふ図 (粕屋郡)



図15 甲本 六孫王経基大宮司に御杯を賜ふ図 清屋画



図16 甲本 同図 玉蘭画



図17 奥村家本 同図 福岡市博物館所蔵

甲本には、玉蘭が描いたと思われる絵図の上に、「清屋」の落款印がある別の絵図が貼り付けられている。通常、上に貼付されたほうに絵図は上書きされるが、奥村家本では玉蘭画のほうが採用されている。他の絵師に絵図作成を依頼しながら、採用しないことがあったということであり、玉蘭の絵図に対する並々ならぬ拘りが窺えるであろう。

以上の絵図は、『筑前名所図会』の絵図製作過程の一端を伝えるとともに、甲本が純然たる初稿本とは言えなくとも²¹、それに限りなく近い稿本であることを示唆するものであろう。

3.4. 絵図の大幅な変更

甲本と奥村家本の絵図を比較すると、同じ画題でありながら全く異なる絵図に変更されているものがある。基本的には改稿された奥村家本のほうが精密な描写になっていくはずであるが、なぜか先行する甲本のほうがより精密な描写の場合がある。代表的な絵図が奥村家本複製版解説にて檜垣が紹介している宗像郡の怨霊出現図である。



図 18 甲本 怨霊出現図



図 19 奥村家本 怨霊出現図 福岡市博物館所蔵

甲本は木々で不気味さを演出し、人物描写も躍動的だが、奥村家本では全く異なる絵図に変更されている。奥村家本の頭注に、「此図は別本にあるを用ゆべし」とあるように、さらに他のバージョンの絵図が用意されていたことが窺える。

甲本独自の描写を持つ絵図は、奥村家本と軽微な違いがあるものを含めると、表3にあげたもの以外に多数ある。奥村家本複製版解説にて、奥村家本の室見橋の描写が簡略だとして、甲本の室見橋が明確に張り出しを描いていることを檜垣が指摘しているように、そうした僅かな違いが様々な研究に結び付く可能性がある²²。

3.5. 絵図の写実性

『筑前名所図会』の景観の絵図の多くは、玉蘭が現地で実写したものとされ、それが資料としての価値を高めているが、甲本は、現地で実写した原画を保存している可能性があり、奥村家本や現在の景観と比較することにより、その写実性を検証することが可能となる。

1) 吉田切抜図（遠賀郡）

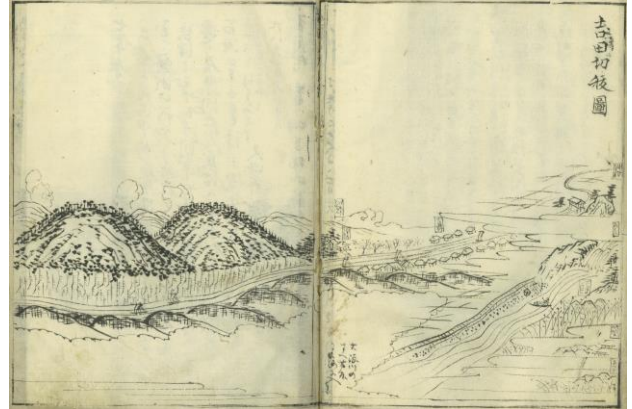


図 20 甲本 吉田切抜図



図 21 奥村家本 吉田切抜の図 福岡市博物館所蔵

遠賀川から洞海湾までを繋ぐ人工河川である遠賀堀川のうち、石工のノミと鋸によって岩盤を開削した吉田切抜を描いた絵図で、玉蘭は本文の割注にて実見した際の所感を述べているが、このような所は見ただことも聞いたこともないと感激している²³。絵図も実見した上で描いているはずだが、甲本では堀川が吉田切抜で東側に曲がっているのに対し、奥村家本は真っ直ぐに流れている。実際の堀川は図22の写真を見ても分かるように、吉田切抜で折尾方面に向かって東に曲がるため、甲本のほうがより正確である。奥村家本が敢えて堀川を真っ直ぐに描いたのは、絵図に追加された李白の詩「早発白帝城」が長江を下る軽舟が千里の距離を一日で進むスピード感を詠む漢詩であることから推して考えると、吉田切抜が開通したことによる船のスピード感を表現するためではないかと思われる。



図 22 現在の吉田切抜

2) 笹栗駅（粕屋郡）

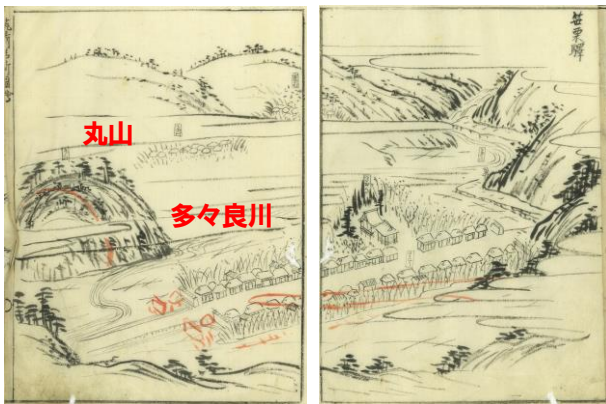


図 23 甲本 笹栗駅



図 24 奥村家本 笹栗駅 福岡市博物館所蔵

現在の粕屋町焼地山辺りから眺望したような形で丸山・笹栗宿駅を描写した絵図である。笹栗宿駅は現在の JR 笹栗駅の東、笹栗小学校前の旧街道東西 700m の間にあり、実際には丸山とはかなり離れているが、甲本の修正指示に従い、奥村家本では笹栗宿駅の範囲をさらに広げ、それに合わせて丸山を左側に寄せている。甲本では、多々良川が丸山から笹栗街道側に曲がっているが、奥村家本では丸山に沿って真っ直ぐ流れている。図 25 は焼地山麓の笹栗街道（県道 607 号）から笹

栗九大の森方面に向かって撮影した写真だが、多々良川が丸山側を通らずに笹栗街道側に曲がっていることが分かるだろう（白の点線）。甲本のほうがより実景に即したものであることは明らかである。奥村家本が多々良川の流れを真っ直ぐにしたのは、実際には離れている、多々良川が笹栗街道側に曲がる地点と笹栗宿駅との距離が、近くなることを憚ったからかもしれない。修正指示からも窺えるように、この絵図はあくまで笹栗宿駅が中心であり、丸山は実際の距離間を無視して無理に入れ込んだに過ぎず、多々良川の流路を丸山との位置関係に合わせる必要はないからである。



図 25 現在の眺望

以上の絵図からは、甲本のほうがより実景に近い描写を残していることが窺えたが、奥村家本と比較することで、目的のためならデフォルメが許される名所図会の挿絵という文脈の中で、玉蘭が何を重視し、どのように実景から改変していったのかを探ることが可能となる。

3.6. 乙本の独自性

乙本は、甲本の補完や伝本上の価値だけでなく、前述のように、絵図に独自の表現が見られることも注目される。

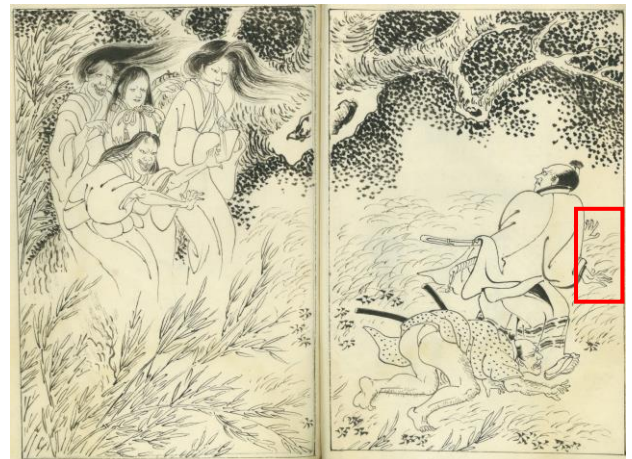


図 26 乙本 怨霊出現図

前掲の怨霊出現図について、乙本では、甲本の描写よりさらに写実的になっているが、甲本では勇ましく刀を構えていた侍が、手を出して怯えているような描写に変更されており、乙本独自の物語解釈が窺える。



図 27 甲本 皇后洩



図 28 乙本 皇后洩

遠賀郡皇后洩の絵図は、魚鳥が遊ぶのを見て神功皇后の怒りが和らいだという伝説を描くものだが、乙本は髪型、服装、装飾品、大刀等の描写が甲本と全く異なっている。乙本の上古観が反映されたものであろう。どの段階でこのような変更が施されたのかは不明だが、『筑前名所図会』自体が改稿されていくのとは別に、文政元年系統の伝本が、時代の変遷に合わせて独自に発展していったことが窺えるだろう。

4. おわりに

本稿執筆時に新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言があり、外出というと近所に買物に行くくらいしかかないため、次第に普段歩いている道や街並みに目を向けるようになり、いつしか古地図や『筑前名所図会』のコピーを片手に篠栗街道を歩くという生活を送っていた。



図 29 甲本 篠栗駅西構え口

図 29 は図 23 で描かれている篠栗宿駅の西構え口 (宿場の出入口に設けられた門塀) を拡大したものである。現在の西構え口跡には石碑のみで遺構等は残っていない。しかし、篠栗街道を挟む水路が、絵図で描かれているように、西構え口跡の手前で折れ曲がっていることを確認できる (図 30 青の点線)²⁴。



図 30 篠栗宿駅西構え口跡

暗渠により写真ではわからないが、現地を歩くと、水が流れる音が聞こえ、絵図で描かれた水路の流れが実景に即したものであること、また、かつての篠栗宿駅の痕跡がアスファルトに覆われながらも確かに残っていることを確認できる。さらに水路を遡っていくと、水路が篠栗宿駅を囲むように築かれていることに気づく。江戸初期に福岡藩により設置された篠栗宿駅には、かつて藩主の別館 (御茶屋) があった。水路が街道を通らずに、篠栗宿駅の周囲を守るように流れているのは、単に生活のためだけではなく、防衛的機能をも担っていたからであろう。今まで気にも留めていなかった水路から、戦国時代の空気の残る江戸初期の緊張感が伝わってくる。

名所図会は本来、玉蘭が自序でも述べているように、「臥遊」、すなわち家から出ずに寝転がって名所を体験するために編纂された。交通に様々な制限があり、自由に遠方に行けない時代ならではの、空間を超えるためのメディアであった。そして、現代においては、失われた江戸時代の景観を伝える、時間を超えるメディアとしての価値を持つ。江戸時代に玉蘭が見た景色の現在を見ることで、200 年の間どのように景色が「上書き」されてきたのかが、灰かに見えてくるかもしれない。

〔附記〕 今回の調査にあたっては、梶嶋政司氏 (記録資料館) と八嶋義之氏 (福岡市博物館福岡市史編纂室) に、特に檜垣文庫の調査において多大なご支援をいただいた。また、様々なご教示を賜った先生方や附属図

書館の皆様をはじめ、下記の機関の皆様は大変お世話になった。記して御礼申し上げる次第である。

九州歴史資料館
福岡県立図書館
福岡市博物館

(以上五十音順)

参考文献

- [1] 井形栄子. 福岡市博物館蔵『筑前名所図会』の挿絵の筆者. 太宰府市公文書館一年報太宰府学一. 2020, Vol.14, p.54-72.
- [2] 石井邦一. 吉木に住んだある国学者の生涯と幕末の福岡藩事情をめぐって—海妻甘蔵小伝—. 木綿間. 1980, Vol.4, p.41-73.
- [3] 一瀬智. 伊東尾四郎文書本『筑前国統風土記附録』について. 九州歴史資料館研究論集. 2012, Vol.37, p.57-76.
- [4] 伊東壽編纂. 福岡県神社庁誌. 福岡県神社庁, 1955, 207p.
- [5] 牛嶋英俊. 筑前の構え口小考. 郷土直方. 2010, Vol.35, p.8-18.
- [6] 牛嶋英俊. 張出し構造をもつ木橋について. かやのもり: 近畿大学産業理工学部研究報告. 2016, Vol.25, p.26-30.
- [7] 観光福岡編纂委員会編. 観光福岡. 新日本社, 1959, 127p.
- [8] 岸田信敏編. 関史筌蹄筑前郷土誌解題. 福岡県立図書館, 1933, 314p.
- [9] 後藤改平. 九州薬業家列伝. 九州薬報社, 1904, 216p.
- [10] 許斐友次郎. 奥村玉蘭翁. 福岡. 1929, Vol.36, p.17-18.
- [11] 新宅信久. 篠栗街道物語(後編). 広報ささぐり. 2010, Vol.577, p.7.
- [12] 高橋昌彦. 海妻甘蔵編著『己百齋筆語』細目. 福岡大学研究部論集 A 人文科学編. 2010, Vol.10, no.7, p.29-42.
- [13] 田坂大蔵. 春日古文書を読む会校訂. 筑前名所図会. 文献出版, 1985, 905p.
- [14] 筑紫豊. 私立福岡図書館館史. 図書館学. 1958, Vol.6, p.215-227.
- [15] 名古屋市博物館編. 名所図会の世界. 名古屋市博物館, 1988, 112p.
- [16] 檜垣元吉監修. 筑前名所図会. 西日本新聞社, 1973.
- [17] 広瀬正利校訂. 筑前人物遺聞. 文献出版, 1986, 152p.
- [18] 福岡市立歴史資料館編. 福岡市歴史資料所在確認調査報告書. 福岡市立歴史資料館, 1982, 339p.
- [19] 武藤軍一郎. 旧尾仲村西浦池掛用水路への水取り出し口の構造. 広報ささぐり. 2005, Vol.515, p.6.
- [20] 村瀬時男編. 博多二千年. 以文社, 1961, 460p.
- [21] 山根泰志. “廣瀬文庫”. 九州大学百年の宝物. 丸善ブラネット, 2011, p.150-151.
- [22] 山根泰志. 幻の国境線—廣瀬文庫『背振山塚図』とその周辺—. 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2014, 2013/2014, p.32-45.
- [23] 夕刊フクニチ新聞社編. 図説福岡県の歩み. 夕刊フクニチ新聞社, 1964, 198p.

¹ 海妻甘蔵『己百齋筆語』第四(福岡県立図書館所蔵, 広瀬 1986 に一部所収)に, 玉蘭没後にその遺志を継いだ有志により申請された『筑前名所図会』上刻願が, 学問所指南役の竹田簡吉(定簡)等により, 城内の絵図等藩内の機密を掲

載していることから上刻を差し止められたことが伝えられている. この話は, 当時参政局にいた海妻自身により実事として記録されている. しかしながら, 勤皇派に近い立場にあった海妻は, 竹田等佐幕派と対立していたためか, 『己百齋筆語』には藩儒竹田家への批判が多数みられ, この記事もそうした批判記事の一つであることは考慮する必要がある.

² いつから不明になっていたかわからないが, 1994年3月8日に不明図書として記録されている.

³ 山根 2014 を参照.

⁴ 旧中央図書館荷受室に, 乙本福岡1冊と, 甲本遠賀郡・宗像郡, 粕屋郡(解体されている状態), 伊都郡・志摩郡計3冊及びその他端紙が保管されていた. いつから保管されていたか経緯は不明だが, 恐らく檜垣文庫整理中に発見されたものが旧中央図書館に送付されたのではないかと思われる.

⁵ 「貴重: 稿本残欠一括(131枚)」と注記されており, 国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースにも転載されている.

⁶ 奥村家本複製版解説以前に, 檜垣を中心に編纂された昭和34年(1959)刊行の『観光福岡』にも, 廣瀬文庫本の写真が掲載されている.

⁷ 仮に博多が巻二だったとすると, 那珂郡・席田郡・早良郡が巻三, 御笠郡が巻四となり, 残る夜須郡・上座郡・下座郡・嘉麻郡・穂波郡・鞍手郡が巻七ということになる. しかしそれでは御笠郡の後に夜須郡～鞍手郡が続く奥村家本の順序とは合わない. そもそも凡例で表明されているように, 『筑前名所図会』は貝原益軒の『筑前国統風土記』を基にしており, 各郡の順序も概ね踏襲されている. 唯一の違いは早良郡の配置で, 『筑前国統風土記』が糟屋郡の後, 怡土郡の前に位置づけているのに対し, 『筑前名所図会』は那珂郡・席田郡と同巻にしている. 『筑前国統風土記』の順序に従うなら, 甲本の巻七は早良郡が配置されるべきであるが, そうした視点で早良郡を見てみると, 下記の2点が注目される.

・那珂郡・席田郡の紙にはない別の綴じ穴が認められ, 綴じ直されている形跡があり, 本来那珂郡・席田郡と同巻ではなかった可能性がある

・冒頭に「早良郡」と入れる予定であったと思われる扉が用意されており, 本来早良郡は巻頭に位置づけられる予定であったことを窺わせる

このことは, 早良郡を当初『筑前国統風土記』と同様, 糟屋郡の後, 怡土郡の前に位置づけるつもりであった可能性を示唆する. しかし早良郡の分量は35頁余で独立した巻とするには足りず, 分量が多い粕屋郡や伊都郡・志摩郡と合わせるよりは, 分量が少ない那珂郡・席田郡と同巻としたのではないかと思われる. 福岡部は本来那珂郡・早良郡の一部であり, その意味で早良郡を那珂郡と同巻にするということは不自然なことではなく, 玉蘭の『筑前国統風土記』に対する独自性を示すものとも言える. ただ, 甲本の巻七が早良郡であったとすると, 残りの欠巻が1巻分のみになってしまい, 巻数が足りなくなるため, 甲本の本来の巻構成については今後さらに検証する必要がある.

⁸ ただし, 本文のみの巻にも, 不自然な白紙が間に入っており, 絵図を入れる予定であった可能性がある. 乙本御笠郡の巻末には, 山家駅の奇石に寄せた秋山玉山の漢詩(『玉山先生詩集』巻一掲載)が掲載されているが, 甲本では奇石の絵図の中に掲載されている漢詩である.

⁹ 宗像郡は表紙自体欠けている.

¹⁰ 奥村家本の用紙の匡郭の大きさ(21.3×15.8cm)とほぼ一致する. 井形 2020 を参照.

¹¹ 四辻公説は, 文化元年(1804)に香椎宮奉幣使として筑

前に下向しており、その縁で玉蘭が序文を依頼したものと推定される。

¹² 昭和 14 年 (1939) に明文堂書店 (福岡市蓮池町) より購入。全 16 冊だが、表紙に 248, 303 等の番号が付与されており、本来は膨大な史料集であったものの一部であることを示唆する。書写年代がわかる史料のうち、大正 4 年 (1915) の神武良知の写本が最も新しいことから、大正 4 年より福岡県神職会において編纂が開始された御大典記念『福岡県神社誌』に関わるものであろう。伊東 1955 を参照。

¹³ 岸田 1933 を参照。

¹⁴ 管見に入った奥村家本以外の『筑前名所図会』の存在を示す他の資料は、下記の通りである。

A) 榎田家本『筑前名所図会』

「郷土史料目録 (筑前部)」(『史淵』2, 1930) に榎田家所蔵の『筑前名所図会』10 巻が記載されている。福岡藩の榎田家といえは、榎田琴山 (1675~1742) や榎田北渚 (1815~1872) を出した福岡藩儒の榎田家が著名であり、北渚は前掲の『己百齋筆語』によれば、『筑前名所図会』上刻願を審議した学問所指南役の一人である。しかし、福岡市博物館に寄託されている榎田家の資料には『筑前名所図会』は見当たらない。

B) 香椎宮文書本『筑前名所図会』

福岡市立歴史資料館 1982 の香椎宮文書に「筑前名所図会 福岡一」写本 1 冊が記載されているが、未見。

C) 「神屋宗湛屋敷と附近の図」

村瀬 1961 や榎垣が監修した夕刊フクニチ新聞社 1964 に『筑前名所図絵』の挿絵として掲載されているが、奥村家本とは構図が異なる。榎垣が提供したのであれば、廣瀬文庫本の可能性があるが、現在博多の巻は一丁も発見されていない。写真を見ると、版心の「筑前名所図絵」が見えず、かつ罫線が歪んでいるので、乙本の形態に近い。

D) 榎田神社本『筑前名所図絵』

榎田神社のみの絵図を、大正時代にカーボン紙へ写したものが、榎田神社文書に所蔵されており、「筑前名所図絵 榎田社 文化十四年頃作」と記載されている。奥村家本より簡略であるが、別本により写したものである可能性がある。

E) 福岡県立図書館波多江文庫『筑前名所図画』

奥村家本冒頭の松離子までの絵図だけをまとめたような本で、特に独自の描写はないが、版心に「筑前名所図画」と印字した独自の用紙に写しており、手が込んでいる。旧蔵者は博多の薬種商の川口屋波多江家で、玉蘭の妻の実家であることと関係があるかもしれない。少なくとも乙本のように、絵図だけを独立させた『筑前名所図会』が他にも作成されていたことを示す。

¹⁵ ただし、甲本の表紙には何かを剥がした跡があり、しかもそれは福岡図書館の蔵書票及び寄託・寄贈ラベルの貼付位置と一致する。

¹⁶ 高木姓は廣瀬家の別姓で、玄銀の末弟の修吉は高木姓を称していた。筑紫 1958 を参照。高木文弘と廣瀬家との具体的な関係は不明だが、閉館後の福岡図書館の蔵書の一部を継承していたことから、廣瀬家と血縁関係にある人物であることは間違いない。高木文弘の蔵書に易占関係書が多いのは、至誠館なる易断所を営んでいたためである。

¹⁷ 寄託後、『筑前名所図会』が展覧等で出品された形跡はない。昭和 33 年 (1958) に日本史家小島鉦作 (昭和 19 年から 46 年まで宗像神社史編纂委員長) から九州文化史研究所に寄贈された『宗像神社関係史料蒐集目録』(昭和 19 年 3 月作成) には、九州帝国大学図書館所蔵の『筑前名所図会』宗

像郡 1 冊 (恐らくは乙本) が記載されており、榎垣以前に廣瀬文庫本が研究者に調査された数少ない例である。

¹⁸ 甲本宗像郡には、澳津嶋の絵図とは別に、田嶋神社の絵図の前に澳津嶋図が掲載されている。澳津嶋の絵図と同じ構図ながらやや描写は詳しい。乙本には澳津嶋図は掲載されているが、澳津嶋の絵図は掲載されていないことから、最初に澳津嶋図が作成され、その段階の伝本から乙本は写されていることが推定される。澳津嶋図の改訂版が澳津嶋の絵図であったが、甲本の段階では整理されずにそのまま併存していたのだろう。奥村家本は澳津嶋の絵図からさらに改訂された絵図を掲載している。

¹⁹ 武藤 2005 を参照。

²⁰ 田坂 1985 を参照。一方井形 2020 は奥村家本に筆者自筆の原画が残っている可能性を指摘する。

²¹ 奥村家本同様、甲本にも落款印を写したのがあるため、既に原画から改稿されているものが含まれている。

²² 牛嶋 2010・2016 は、『筑前名所図会』における宿駅の構え口や橋の張り出しの描写に着目した論考である。

²³ 前述のように、『筑前名所図会』は『筑前国続風土記』を基にしており、本文でも大半はその抄録であるが、この吉田切抜のように、現地での見聞に基づく独自の記述がみられる場合がある。特に『筑前国続風土記』に記述がない場所あるいはその編纂後に状況が変化した場所についてはそれが多く、これまで『筑前名所図会』の本文について、玉蘭の独自性という観点での分析はなされていないが、廣瀬文庫本は本文の成立過程を明らかにする上でも基礎資料となることが期待される。

²⁴ 新宅 2010 に掲載される江戸時代の篠栗宿の絵図 (平井家所蔵) でも確認できる。



本著作の著作権は著者に帰属します。注があるものを除いて、本著作の内容物はクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 4.0 国際 (CC BY-NC-ND 4.0) ライセンスの下に提供されています。

<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja>